

母性看護実習指導の展開

池田 公子

I はじめに

本学は、病院を持たない看護婦養成を行っている学校である。そのため臨床実習指導については、多大の工夫と努力を積み重ねてきた。¹⁾

母性看護実習は、各科実習として成人看護実習(内科系、外科系)、小児看護実習の4本柱の一つとして大きくとり上げられ、それぞれ学内実習と臨床実習にわかれている。

総合病院の産科は、もともと病床数も少なく、入院期間は1週間と短かく、それに比して学生数は、上記の4本柱のため多数で病棟は1年中学生在が実習している現状である。

今まで産科病棟の母児の看護は、おおむね母児異室制であり筆者も20余年間このような看護を経験してきた。

しかし現状の人口構造の変化からも推察されるように出生数の減少より母児異室制の看護から母児同室制看護への変化が近年多くの施設にみられるようになった。実習病院も例外ではなく、産科病棟管理の実情も大きく転換期を迎えつつあり、今までの母性看護実習指導をまとめ問題点を模索し、今後の母児同室制看護の実習指導の展開を考えたい。

II 実習目標

筆者の担当する母性看護実習II(臨床実習)は、産科病棟、陣痛室、分娩室、新生児室を実習場として用い、実習期間は、学内実習1週、病棟実習3週3単位(135時間)である。実習は「看護学実習実施要綱」(以下実習要綱という)にもとづき授業計画を展開している。

授業目標

- 1) 妊娠、分娩、産褥及び新生児の生理的経過を理解し、母性の特徴を把握する。
- 2) 実践を通して妊婦、産婦、褥婦及び新生児に必要な看護と保健指導を学ぶ。

としており、実習場所は学内と病院と助産院とし実習目標を以下のように定め授業目標を展開する。

1. 学内実習 実習前(1) 実習目標を理解し実習計画を立てる。(2) 母性看護実習に必要な知識を復習する。

実習後(1) 実習目標の達成度を検討する。

2. 産科病棟 (1)妊婦、産婦、褥婦に対する看護及び保健指導の実際について習得する。(2)妊娠、分娩、産褥時の異常症状に対する対症看護実践について習得する。(3)産科病棟における看護業務が日常どのように進められているかを学ぶ、家とのつながり、社会とのつながりなどと関連し、継続看護の必要性について理解する。(4)産科病棟における救急看護の重要性について理解する。(5)正常に経過するケースの看護計画が立てられる。(6)母性看護の基礎的看護技術を習得する。

3. 新生児室 (1)出生直後及び出生後1週間以内の新生児の生理的变化について理解し観察力を養う。(2)母親及び家族に対する育児指導のできる能力を養う。
4. 助産院見学実習 (1)地域における助産及び母子保健活動の実際について理解する。

III 指導計画

1. 実習場で上記の実習目標を短期間で効果的に達成させることを考え、褥室(陣痛室、分娩室を含む)2週間、新生児室1週間としている。本学は、実習施設を総合的病院K病院、総合病院N病院としており筆者は、K病院の実習指導を担当している。K病院産科に一度に配置される学生数は12名前後で、分娩数は、1ヶ月平均80例前後、褥室19床、陣痛室3床、分娩室2室、新生児室24床である。

この実情をふまえ学生にすべて入院から退院まで継続して褥婦を受持つことは至難の技であり、産科外来実習は実習期間が短かいので割愛している。(表1)

新生児室実習は、新生児の特殊性と新生児チームにわかれていること、ベット数を考え実習生は、3名と

表1) 母性・婦人科(三校合同)計画表 (K病院)

月日 番号 氏名 週	9/				10/				11/				12/					
	1	2	3	4	5	6	7	8					1	2	3	4		
1 a	婦人科					新			実習のない週				婦人科			褥室		
2 b																	新	
3 c																		
4 d				新	新													
5 e																		
6 f				褥	新													
7 g	新	婦人科			新													
8 h						室	新											
9 i																		
10 j		新		婦人科		新												
11 k								新										
12 l																		
1 a	新褥室		新	褥室	新	新	新	新	褥室	新	褥室	新	褥室	新				
2 b																		
3 c																		
4 d																		
5 e																		
6 f																		
7 g																		
学生数	新生児計	3	3	3	3	3	3	3	3	1	3	0	3	3	3	3		
	褥室計	9	9	9	9	13	9	9	5	4	6	4	0	9	10	10		
	婦人科計	6	6	6	0	0	6	6	6	0	0	0	6	6	6	0		
	総数	18	18	18	12	16	18	18	14	7	7	7	0	18	19	19	13	

註) 1. 婦人科 婦人科病棟
 2. 褥室 産科病棟
 3. 新 新生児室
 4. // 実習のない週

決められ3週間の実習期間の1週をあてている。

2. 実習形態 学生は、50名を2病院に分け25名づつとし、これを4グループに編成し6～7名とする。できるだけ褥室実習が2週つき新生児室1週のローテーションとするが、褥室1週と途中で切れる学生も1～2名あるが新生児室実習を3名と定められていることが原因となっている。

3. オリエンテーションと技術習得 実習要綱と病棟看護手順を参照し病棟紹介、実習方法を説明する。技術は、母性看護実習Ⅰ(学内実習)で習得した母性看護技術、①妊産婦体操、②妊産婦の観察と諸計測(レオポルド触診法を含む)、③乳房の手当、乳房マッサージ(慶応式)、④悪露交換法と利尿後消毒法、⑤出生直後の児の取り扱い法(観察、計測、沐浴法を含む)等をいってそれぞれ学内実習で作成したレポートを使用し再度学習、検討する。²⁾

4. 受持妊産婦(以下受持患者という)の選定 産科病棟は、看護単位を褥室チーム、新生児チームにわけており、褥室は母親中心の看護展開、新生児室は新生児中心の看護展開となる。しかし本来母児共に看護すべきであり、この点を十分考慮しながら受持患者を決定する。

1) 褥室看護 先にも述べたが褥室看護は、陣痛室、分娩室の実習を含んでいる。

①実習第1日には、出来るだけ分娩後間のない患者を実習生全員に受持させる。その中でも特に学生が実習する内容を希望する場合はできる限り希望を入れる。又2年次生学内実習の課題実習した内容の継続学習も含み選定している。表2)

②入院から陣痛室実習は、入院にいたるまでの産婦及び家族を含み、入院時の状態を知り妊産婦をとりまく環境等も理解させながらバルトグラムを作成するため必ず1名は受持ちを経験させる(以下上記を入院時取扱いという)。陣痛室は、産婦の心理を理解し助産婦の指導のもと分娩に対する不安の除去、苦痛の緩和、家族への配慮、母親となる自覚をもたせるような援助を学ばせる。

入院時取扱いは、妊産婦との出合を大切に考え、必ず見学実習の終了した学生に取り扱かわせる。そのため常に学生は2名づつ組ませ、1名が主として実習し他の1名は、介助しながら見学実習させる。入院時取扱いをした学生が、その患者の受持ちとなる。

③分娩室実習は、陣痛室からの分娩経過をよく理解し、疲労の防止、体力の保持、清潔の保持等を考えさせながら助産婦の介助、指示にしたがい学生のできる

看護を中心に展開し、実習する。

学生は、受持患者を中心に観察(陣痛発作、間欠、児心音の聴取、出血量、破水、排泄、胎盤計測等)、助産業務見学および援助を学ばせ、分娩第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期、第Ⅳ期の看護計画を立案し実習する。

出生直後の新生児は、産婦受持ちと別に定め、胎児娩出の見学(胎位、胎向、アプガール指数、性別等)、観察及び援助を学び同時に、ネームバンドの作成、母親によるネームバンドの確認、児への装着等すべて助産婦の指導のもと実習する。

以上の看護をできるだけ継続的に実習させてはいるが、前述したように12名余の学生にできるだけ実習要綱と指導計画にそうよう受持患者を選定するが、看護は24時間展開されており、上記の計画通りに実習できないこともあり、陣痛室から又分娩室入室時から受持つこともあり、この時はバルトグラムの送りを徹底し、交代時の送りの練習もかね実習させる。

Ⅳ 実習方法と内容

看護学校カリキュラムのガイダンスにもあるように、おおむね成人看護実習終了後実習に入る方がよいとされており、これは母性看護が、疾病でなく生理的現象であり今までの基礎実習、成人看護実習とは異なっていることを理解させなければならない。又「ひとが生れもつ種族保存(生殖)のはたらき」に対する深い理解をふまえ、種族保存の重要な働きと女性であると同時に母性であることを理解させる。このことが母性看護の特殊性であり、又学生にとっては他科とは非常に異なるというとらえ方をしている点でもあろう。しかし学生に、自分達と同年令の女性で非常に身近であること、自分も近い将来、同じような時期を迎えるかもしれないことを実習でよく理解するよう指導する。そのため実習資料の使用と具体的な記録物の記入をさせる。

1) 母性看護実習行動目標 母性看護実習にできるだけ早く慣れ実習できるよう母性看護実習行動目標(以下行動目標という)を使用する。これは産科外来、陣痛室、分娩室(産婦の看護)、褥室(褥婦の看護)、新生児看護等の実習行動目標で、知識と技術の項にわけられる。

行動目標のねらいは、看護の展開、配慮すべき事柄、観察点、援助方法、看護上の処置を行う際の準備、技術の要点、後処理の仕方、注意事項等を含んでおり、看護手順と共に使用している。

作成動機は、産科病棟の指導者は大部分助産婦であり、助産と看護を合せ業務を行っており、看護学生へ

表 2) 母性看護実習の学習記録のテーマ

学生	母性看護実習Ⅰ課題学習テーマ	母性看護学習Ⅱ ケース・スタディのテーマ
A	人工妊娠中絶について	褥婦の育児経験を生かした看護
B	更年期婦人の保健指導	核家族である経産婦の看護
C	母子のきずな	てんかんで母乳中止となった初産婦の看護
D	性 教 育	度々人工中絶をくり返した褥婦の看護
E	妊娠婦の母性意識	肥満の経産婦を看護して
F	勤労婦人の保健指導	復古現象の遅れていた経産婦の看護
G	妊婦管理(妊娠の生理と経過)	胎盤用手剥離をされ合併症に悩む経産婦の看護
H	新しい親になるべき人に対する指導	児異常のため正常な母児間の接触をもてない褥婦
I	人工妊娠中絶について	強い陣痛のため帝王切開となった初産婦の看護
J	思春期と性教育について	妊娠中毒症で産後血圧改善に時間を要した褥婦を受持ち
K	家庭分娩について	未熟児センター入院中の児を持つ初産婦の看護
L	妊 婦 体 操	妊娠中毒症の初産婦の看護
M	妊娠中の栄養指導	妊娠中毒症に対し病識のない初産婦の看護
N	妊娠中の保健指導について	初産婦における看護
O	出産教育の支援体制	新生児黄疸の強い児を持った経産婦の看護
P	無痛分娩(ラマーズ法)	母児同室制における経産婦の看護
Q	妊婦の保健指導(栄養中心に)	児の直母の吸吮状態の悪い初産婦の看護
R	勤労婦人と母性保護	奇形児を持った経産婦の看護
S	思春期の保健指導	核家族で2人の子供の育児に悩む褥婦の看護
T	会陰切開と会陰保護について	初産婦の看護を通じて母児同室制の再考察
U	家族計画について	初産婦で児がNICUに入院した褥婦の看護
V	母乳推進と母乳栄養	授乳困難を伴う初産婦の看護
W	里帰り分娩と保健指導について	初産婦の里帰り分娩の看護をして
X	妊娠中の体重増加について	前回産後乳腺炎を合併した経産婦の看護
Y	職場の母性保護について	母乳栄養の不安と合併症を持つ経産婦の看護

の要求度も個々様々で、実習指導よりも病棟業務が優先され助産業務と看護業務との接点が不明確で専門的な実習内容を要求されていた。このことは学生に主体的な臨床実習を学ばせにくくし、実習意欲を減退させることにもつながり、病棟婦長、臨床指導者が、どこまで指導すべきかに苦慮されていた。この実情を把握している臨床指導教員が集まり問題点を調査し臨床場の意向をも入れ作成したものである。³⁾

本来、看護学生の母性看護実習は、褥婦の看護が中心となる看護展開である。しかし産科病棟は、助産婦による分娩中心の看護活動が展開され、看護学生も実習内容においてまよいを生じていることは、本学、他校とも同様であり、実情にあわせ分娩中心に見学実習をくみ陣痛室、分娩室、褥室、新生児室をローテーションする形態で実習をしている。

以上のような理由で作成した行動目標は、知識と技術の項にわけ知識の項は、主として復習に使用し学生にノート作成をさせる。技術の項は、学内実習項目をふくめより具体的に臨床場面を想定し作成した。その達成度の基準を「1人でできるA」、専門的知識を要するものを「指導者の援助のもとにできればよいB」にわけた。これは、母性看護実習経験録に記入されており、2施設を調整して項目を選んだものである。経験の最初は「実習のねらい」の項に技術内容を書き「正」の字で回数を記入する。

2) 実習目標の具体的展開 実習目標は先きに書いた通りで、これを学生個々で具体的に展開させるため「母性看護実習で学びたいこと、希望すること、考えたこと」を学内実習の実習要綱説明後に書かせ受持患者選定資料に使用する。

又実習目標を1週毎に目標計画させる。これは他科と異なり生理的現象で特殊であるという理解の解決に使用している。学生が自分の目標を明確化しそのまじい方向に変化してくれることも目的とし目標設定後、その目標を達成する技術を書かせる。つまり具体的で一義的な表現がなされる方法を用いた。

多くの学生は、妊産褥婦がどのような状態にあるのか想像もつかないし、出生直後の児を見たこともない現実の中で目標の計画はなかなか容易ではない。そこで学生がどのように計画したかをY学生を1例としてあげる。

学生紹介；看護実習は、成人看護実習（内科系、外科系）、小児看護実習を終了し母性看護実習に入る。学生は県外出身者であかるくまじめな学生と受けとめている、実習は、褥室2週、新生児室1週と経験する。

実習目標；第1週 目標 正常な産褥の経過を学び指導する。入院時取扱いをし分娩各期の看護を学ぶ。

①褥婦の看護（観察、乳管開通法など）を実際に行う。

②退院指導をする。（育児、家族計画、産褥の指導）

③入院受け入れをしバルトグラムを作成。

④分娩時産婦側で呼吸法の指導や観察をする。（陣痛、出血、破水、食餌、水分摂取）

⑤分娩時、児の娩出、胎盤剝離徴候など見学する。（排臨、発露、児の胎位、胎向）

⑥母親学級に参加し指導内容について学ぶ。

⑦産褥体操の必要性を知り指導ができる。

⑧記録、報告について学ぶ。

（線は筆者が入れた箇所以下同様）

第1週は、受持患者は、分娩後2日目経産婦で前回乳汁分泌状態が悪く、K病院が「母乳主義で、小児科が有名なので入院を希望した」という。Y学生は、乳汁分泌機能を十分生かすことを中心に看護計画を立案し乳管開通法、搾乳の技術を学ばせた。

第2週 目標 1週目で行えなかった看護を実施し、1週目で行った看護を再度確認する。（線は「こと」を看護とする。）

①入院受け入れをし、バルトグラムを作成、問診の方法を学ぶ。

②分娩時は、母体側にたち、呼吸法の指導と観察をする。

③退院指導を行う。（育児、家族計画、産褥指導）個別性を考える。

④授乳指導を行う。（乳頭の状態、母児の体位、分泌量のチェック）

⑤分娩第1期の看護、指導（児心音の聴取、陣痛の観察、呼吸法の指導、腰痛時のマッサージ等）する。腹部のマッサージ

⑥分娩時、外陰部の消毒の介助及び胎盤計測をする。

⑦1週間で褥室実習のまとめをする。

入院受け入れは、T産婦をする。バルトグラム作成をし、分娩までの観察、記録、報告を実習し、陣痛室より分娩室にうつす時期も経験する。外陰部消毒をし、産婦の和痛法を共にし、汗を拭き、水分補給、陣痛時はげましも試みた。

学生の反省；今日は、入院受け入れお産がありとても忙がしかった。

バルトグラムを作成する時、後から後から聞き忘れていたことを思い出し何度も産婦に聞き悪かったと

思う。この経験を次に生かしたい。

児心音聴取でトラウペで聴取することができず、ドップラーを使用したトラウペで聞こえないと言ったことで産婦さんが心配され不安がらせたことを反省する。しかし聞こえないものを聞こえると報告できないし、すぐ先生に聞いてもらい、赤ちゃんは元気ですよといわれた時、私もTさんもホッとした。ドップラーの音を聞いてトラウペで聞きとれるようになった。
(「先生」は筆者、以下同様)

いきみ方、呼吸法の指導をしたり、はじめはいつ陣痛があるのかよくつかめず、深呼吸をして下さいといっていたが、先生にお腹に手をおいてといわれ、はじめて陣痛がつかめた。講義は学んだけど産婦さんを見るとどんなにしてあげてよいのか夢中で看護した。

お産後、話をした時、分娩についてあげたこと、仙骨部のマッサージのよかったことを感謝され、あまり深く考えずやったことが、又陣痛があまり強いのでどんなにしてあげてよいのか判断に苦しみたことをいわれて、このような援助がとても大事なのだと、いわれてみてはじめてわかった。——分娩時

第3週 目標 新生児の生理的变化について理解し、観察する。育児について指導する。

①新生児に適した環境はどんなものか学ぶ。

②新生児の生理的特徴を把握する。(呼吸、体温、黄疸、便、尿、反射—モロー、バギンスキーその他)、体重の変化、皮膚、臍等。

③新生児の計測をする。頭部の計測、体重、身長、胸囲。

④出生直後の新生児の取扱い。

⑤沐浴をする。(清拭法を含む、準備、後始末)

⑥抱き方、寝かせ方を学び、母親に指導する。

⑦衣服の着脱、おむつ交換を行い指導する。

⑧母児同室制についても考える。(一部同室制あり)

⑨記録、報告について学ぶ。

以上のように使用している。

目標用紙は、第1週はほとんど実習目標を変化させ、一つ一つの技術項目を上げている。第2週は、1週目をふまえ目標が達成できたかどうかの評価を含め立案するのでより具体的となる。

第3週は、場所は変るが、より具体的な立案で筆者の実習意図を学生が真剣にとりくみはじめていると思われる変化がある。これは次に述べる「4号紙」に具体的に表現されるが、4号紙は各科の特徴ある技術実習が表わせない欠点があると思われるのでこの用紙を考えた。

3) 4号紙による看護展開 「4号紙」とは、「患者の問題点、具体策、評価、反省」の用紙で、それぞれの問題点にあわせ書く。これは、国立O付属看護学校の受持患者記録(看護過程記録)の「1号紙;患者紹介、2号紙;疾患の一般的理解、3号紙;情報と判断、4号紙;看護計画と展開、5号紙;考察」の中の4号紙である。

従来、1日の行動計画表を使用していたが、これは簡単な表でこれでは患者中心に全人的にとらえることは困難であり、病棟側もせっかくの受持制看護が機能別看護に傾きやすく、又学生が行動計画を具体的にノートに書いており、実習校がすべて同形式のものを使用した方が、朝のカンファレンス時にも指導しやすいという病棟側の意向もありこの4号紙を使用することになった。4号紙を1年間使用したので学生の使用後の感想をまとめた。

①4号紙の書き方で困ったこと。

○問題のあげ方を適確に表現することがむずかしくどう書いていいのかわかる。例えば「乳緊が悪い」が問題となるが、問題であることがわかって「～のために～である」と理由づけを科学的にする必要があるのでもむずかしい。

○～による～があつて～する可能性があると考えるとき、はっきりした原因がつかめず、又勉強不足で自分に理解できていないため書けなくて困る。

○観察点等が、直接患者の問題とはつながらないことがあるのでそれが問題点に書けない。例えば褥瘡の毎朝の観察点でこれを上げると毎日同じようなことばかり書いているといわれる。

○患者が、重症になった時又手術の時は、バイタルサインのチェックその他の状態を観察する時、手順にそって項目だけ書くようになるが何か特別な問題点を作って書かなくてはいい気になり困る。

○問題のない褥瘡には、無理してこじつけの問題を書くこととあせり書けない。

○看護問題を書く時、どう理由でこの問題がおこっていたのか書こうと思うと非常に長くなり何枚も一つの問題点で使う。

○問題点で「～の可能性はある」という時、問題点なのかどうかかわからない。

○一つの問題点が重複している場合があり、この時は一つにまとめた方がよいのかどうかまよう。例えば「乳汁分泌が不良である」の時、褥瘡の問題は児との関係、食餌、妊娠経過中の服薬、分娩時出血等の問題があり重複することが多く、一つにまとめて書くのかそ

れぞれの問題点の項目に書くのかまよう。

○問題点は違うが具体策が同じになる場合がよくある。このような場合具体策をどちらに書けばよいのか、又切り離して書けない場合もある。

○4号紙に対し助産婦間で意見の違うこともあり、その時はどんなにしてよいかわからなくなる。

②目標について

○目標が、患者中心になかなかなく自分中心になることが多い。

○患者中心の立場になっての目標が書きにくい、自分の思ったり考えたりしたことを書くので主観が入りやすい。

○目標を患者中心にすると表現がむづかしく患者中心にしなくてはいけないと思うと書けない。

○目標が抽象的になり過ぎたりする。

○問題点と具体策がわかっても目標をどう書いてよいかわからない時もある。

③解決策

○できるだけ具体的に書きなさいといわれても、次の日は違う助産婦で毎日リーダーが変わるのでいわれることも違い、これ以上くわしく書けないのでくわしく書けといわれるのは苦痛である。

○問題がないと思われる時は、具体策もほとんどわからないことが多い。

○具体的に、具体的にといわれてもどんなのが具体的なかわからない。

○解決策には、自分の行動計画を書くが、それもはっきり書いておかないと動けないし、又その書き方がむづかしい。

○解決策がいつも同じようになり進歩がみられないし、特に観察の時そのようにいわれ自分達も思うが、それ以上書けない。

○毎日実習することを書くとそんなことは当然だから書かなくてもよいといわれる人もあり、書かないと書いていないといわれる人もある。

④実施・評価

○自分の実習したこと、患者の反応はすぐ書けるが、評価は書きにくい。

○実習したことが患者に本当によかったかどうかはすぐわからなく評価はむづかしい。

○術後、分娩第Ⅳ期など観察項目が主なので実施、評価を書くのがむづかしい。

⑤よく書けたと思われる時

○問題点がはっきり書けると解決策が立てやすく自分の方針がはっきり書ける。

○看護問題のない時は、観察点をはっきり書いておけば、結果・評価が書きよい。

○児のこと、乳汁分泌のことを中心に書く代わりに細かく書けた。

○参考書等をみてできるだけ具体的に書くと自分のすることが総べて具体的な行動となり動きやすくなった。

○目標に対し一つ一つ手順にそって具体的に書き注意点も書いたらよいといわれた。

○問題点はおかしいといわれたが解決策を細かく書きたいならよろしいといわれた。

○手術患者受持ちの時、その日の手順にそって時間を書いたら行動しやすく具体的によいといわれた。

○解決策で自分の考えられることを全部書いておくと他の患者の時にも役立ちよく勉強できているといわれた。

○4号紙はバラバラにせず、はり合せてみると問題の経過がよくわかり次の日の計画が具体的に立てられた。

○4号紙で勉強したことをその日その日でまとめておくとケーススタディーに役立った。

以上が、使用後のまとめである。学生は非常に努力して書いておりそれなりに学習効果を上げている。指導者側の努力もさることながら検討の余地もある。他校共、同様の感想を述べており、婦長、臨床指導者とも話し合いを重ねている。筆者も書き方はともかく具体的に看護活動を指導し、具体策の巾を広げるよう努力している。学生自身効果のあがる用紙ともいっているので、積極的に問題点を検討し今後の指導に生かしたい。

3) ケーススタディ作成 学生が、受持った症例の中より1例をケーススタディにまとめさせている。まとめるためにあらかじめ学内実習で指導しておく必要から高橋百合子編「看護学生のためのケース・スタディ」メヂカルフレンド社発行のものを使用している。

看護過程の展開は、POS形式を使用しており成人看護実習（婦人科）においても指導する。

(1) アセスメント；情報の収集と問題の明確化（重要な行動の明確化、重要な行動に影響を及ぼしている因子の明確化、看護問題の提示、問題の優先順位の決定）－図式化・文章化

(2) 計画立案（目標の設定、看護活動の選択－具体策の決定）

(3) 実践、評価（ケアの計画、実践、評価）

以上婦人科実習で使用したものを再度検討し学生共に研修する。

ケーススタディにまとめるには、母性看護の視点で

患者を観察し、専門用語で表現することの勉強を含めこの参考書を使用している。又具体的な看護記録も必要であり、実習目標、4号紙は十分活用できる資料であり、系統的に情報収集をし、それにより適確な問題の抽出、具体策を上げ実践し、自己評価をしなければならない。多く望まなければそれなりに入院から退院指導までの記録として効果があるものと考えている。しかしながら実習指導を続け、講義を持ち、25名のケーススタディの指導は、非常に努力を要しおのずと限界があり、主として帰校日(火曜日)を指導日として一日あてているが十分とはいえない。そのため学生も3週間の実習のない期間を有効に使用できかねている現状である。

今までケーススタディで問題となった点は、①表題の選定がむずかしい。②病棟で使用している略語をそのまま使用している。③症状を(+), (-)と書いている。④看護で一般的に使用されている外国語はよいが、産科のみ、その病院のみで使用されているものを使用している。⑤妊娠経過を中心としないケースは、表やパルトグラムを使用させ必要な所を具体的に書かせる。⑥「はじめに」は1枚は書かせる。⑦参考文献、引用文献の書き方がはっきりしていない。実習資料のみで書いている学生もある。⑧一応入院から退院までの一週間は入れさせる。受持期間は実習日でなくても必ず記録に残すこと。

以上のようなことをとり上げ具体的に指導をしている。特に文献を参考にせず、看護記録の傾向が強いことを一番の問題としており、4号紙作成時より文献を読むよう指導する。

母性看護実習は、短期間の実習でケーススタディを書かせることは、いささか無理ではあるが、入院期間も1週間であることにも幸いされていると思える。

5) 具体的実習指導計画 ①実習第1日目; 分娩直後から2日目くらいまでの正常褥婦を1名受け持たせ、あらかじめ正常褥婦の看護計画の原則を学内で復習、立案したものを検証の目的で実習させている。

第2日目; 入院時取扱い見学実習、分娩見学実習をする。他校が、月、火、水曜日と入院時取扱い、分娩見学を実習するので本学学生も同時に1名づつ見学する。週後半木、金、土曜日には本学学生が実習し、受持患者を入院時より受持つ。

第3日目; 見学実習は一応3日目くらいまでには終了し、週後半の実習が生きるように積極的に学生を実習させる。

受持患者は、一応2名とするが分娩は、予定通り見

学できないので分娩のある時は、その機会を十分生かし、ない時にも学生が十分実習内容が満たされるよう4名くらいまで受持たせ、他病棟にない患者数の煩雑さ、救急看護の要素もふまえ実習させる。受持患者は、初・経産婦、正常・異常経過も考慮する。学生は成人看護実習終了後で、ある程度看護援助の必要度に合わせ看護展開ができなければならないことを理由にし、受持患者を多くしている。

②陣痛室 分娩室実習; 正常な産婦の観察を実際に行う目的である。入院時取扱いに引き続き、産婦の全身状態に異常徴候又異常をきたす要因はないかを観察しながらパルトグラムを作成し問診の仕方、記入法を練習する、分娩室系の助産婦の指導を受けながら分娩第Ⅰ期から第Ⅳ期の看護を実習する。分娩は、初・経産婦の違いは当然あるが、個別性も非常に強い。これを学生が観察しすぐ看護計画を立案することがのぞましいが、とうてい時間的に間にあわないので、行動目標にそって正常妊産婦の看護計画を4号紙に作成し、あわないものは除去し、たりないものを補ないながら予測される看護計画を立て、その上に患者の個性を生かすよう指導する。学内実習の技術もここで学ばせる。

パルトグラム作成後は、必ず助産婦に報告指導を受け、記入の都度、点検を受ける。

陣痛室実習は、分娩第Ⅰ期看護で、レオポルド触診法、児心音聴取、パルトグラム作成が中心であり、学生の技術のまずさから産婦に不安感を抱かせてはならないので必ず筆者が指導するよう心している。学生は受持患者に付添い自分のできる看護は何かを十分考えさせ人間関係づくりをし分娩へとすすめる。

分娩室実習は、見学実習であるが、2例以上見学・介助するよう目標に定めている。分娩の進行を判断するための観察を目的としており、1回目は、母体側か、新生児側かにわけ、見学実習後は、具体的に記録をとり次回の分娩見学実習が生きる資料作りをさせ、助産婦の直接介助ができるようにする。見学実習は、助産婦、他学生について行うが、できれば、助産婦の方が好ましいけれど実習生同志ですると案外、注意されたこと、困った点を学生の視点からとらえて申送るので効果がある。しかし分娩についてわからないこと、不足の情報は、係の助産婦に指導を受け見学記を完成する。

分娩時看護は、産婦との人間関係作りに最もよい場であることを経験しており積極的に看護技術を生かすよう指導する。

分娩後2時間の観察、悪露交換、歩行指導は、学内

実習レポート、手順を参考に全員に経験させる。指導後は必ず、教員、助産婦の評価を受ける。分娩後8時間で歩行を開始するので、1度も悪露交換の経験なくして実習終了することのないよう必須項目としている。又、よい関係ができていると自然に学生はこの項目をなしとげる。

③褥室看護；看護学生にとって必要な看護であり、母児が順調な経過をたどり退院でき、さらに退院後の家庭生活によりよく適応できることを目的に展開していることは上記している。褥室看護目標はより具体的に指導する。

1. 復古現象を促し、無理なく平素の生活にもどれるよう援助する。

1) 子宮復古を促す。2) 創部の治癒を促す。
3) 全身の復古を促す。4) 異常状態に多く気づき対処できるようにする。5) 児の母として家庭生活にもどれるよう考えていく。

2. 母乳分泌を促し母乳栄養の確立をはかる。

1) 母乳分泌を促す。2) 乳頭に問題あっても授乳できるよう介助し搾乳指導をする。3) 母乳栄養に自信がもてるよう乳汁分泌を維持させる。4) 乳頭亀裂、感染を防ぐ。

3. 母性愛をより高める。

1) 分娩後12時間後に第1授乳をしてもらう。
2) 母親に児の情報を提供しより関係が深まるようにする。

4. 育児が不安なくできるようにする。

1) 退院後の育児についても援助する。①沐浴指導、②授乳指導、③臍処置、④季節による育児ができる、⑤児の異常発見のための観察。

5. 家庭生活を円満に維持、発展できる。

1) 家族の健康増進、新しい役割に適応できる。
2) 家族計画についての援助。

6. 記録について学ぶ。

以上のように具体的に目標指導をし、事例にあわせ1週間の計画とし、退院指導は1例経験させる。(個別指導)

正常褥婦にあっては、1週の入院期間であり、受持患者2名以上を受持ち、できれば、実習要綱のように初・経産婦、正・異常の経過を考慮しながら巾広く実習させるが、まず正常に経過する患者で上記の経験をさせる。

産科病棟は、一日の総合観察を、午前中に行う手順になっており項目は上記の目標に含まれており、助産婦に報告後カルテに記入し、午後は申送り前に午前中

同様の手順で再度観察し総合点検を受け準夜勤務者に一日の経過を報告する。4号紙についてもカルテの点検時、報告するが、点検は筆者が行っている。

4号紙を書く上で、産後間もない褥婦の復古現象や乳汁分泌等の変動は、学生に予測できないほどはげしく、多少個性には欠けるが毎日の看護原則、手順にそって観察させる。これは問題点を見のがさない手段でもある。又問題のない患者もあり、分娩後3日目くらいまでは、学生が必要とするならば8時頃に病棟に出て、産褥体操の実施、カルテによる情報収集を行っている。

短かい入院期間中に退院指導(褥婦の生理、家族計画、育児指導、沐浴指導)が月曜日から金曜日まで集団指導で10時30分から11時30分まで組まれ学生も受持患者と共に受講する。

又、母親学級も開講され、3週間の実習期間中に必ず1回見学実習し、問題解決の一助として組み入れている。

褥婦は、一般に正常に経過する人の方が大部分で、日常生活援助もほとんど自分ででき、早期離床(安静は分娩後8時間)のたてまえから分娩後でも日常生活動作は、ほとんど自立しており、生理上異常になり易い状態にあることを学び、問題解決策を考える。又乳汁分泌、育児に対しては関心が強いので、この点を十分生かすよう看護計画の指導を行う。看護技術も搾乳、乳管開通法、必要なら乳房マッサージ(藤森式、桶谷式)を行う。技術が生かされると学生にとって大きな自信につながる。

沐浴指導は、褥婦の関心も強く、学生も学内実習、新生児室実習で経験でき、受持患者が希望すれば、沐浴人形で実習している。

育児指導は、個人指導で小児科医により行なわれ受持患者と共に指導を受ける。

学生が個別に退院指導をする場合は、見学実習後、指導案をカンファレンスにかけたものを指導させる。

④新生児の看護；新生児室実習としており、出生直後の生理的变化の観察と母親に育児指導ができることの目的で行っている。目標は、

1. 保育環境の調整ができ、寝具、衣類について学ぶ。
2. 授乳介助及び哺乳びんで授乳できる。
3. 児を適接に抱いたり寝かせたりできる。
4. 寝衣の着脱、おむつ交換ができる。
5. 臍の観察、処置が十分できる。
6. 児の健康状態の観察ができるー反射

7. 啼泣時に適切な判断、対応ができる。

受持新生児は、実習時1名を決め、他の1名は出生直後の児を受持ち2名とする。毎日の観察は、呼吸、心拍、哺乳状態、排泄、チアノーゼの有無、皮膚の状態、黄疸、臍の状態を観察し異常の早期発見につながる指導をする。

母児のきづなについては、授乳時の援助、新生児室での児の状態、14時のおむつ交換時、哺乳量測定方法、不足時の5%ブドウ糖の与え方等の育児指導をする。母児異室制の欠点を補ぎなえるよう受持児と母親との接触を十分に実習させる。

新生児の清拭(沐浴を含む)は、毎日実習し受持患者の沐浴指導の援助ができるようにさせる。又沐浴指の直接介助ができるようにする。

学生の保健指導は、行動目標ではB項目であり、あくまでも助産婦の指導を必要とし指導内容は、あらかじめカンファレンスにかけ内容を点検されたものである。以上の経過のないものはきびしく禁止している。

実習施設の関係で未熟センター実習が割愛されていることからぜひとも新生児室実習は必要である。出生直後1週間の生理的变化の観察も必要であり、3週の実習の1週を当てている。外来実習は、母子手帳、カルテより情報源として活用させ外来看護の意味を学ばせるようつとめる。

V 考 察

現在、本学学生の年令は、20才余に集中し、平均的核家族といえる4～5人であり、兄弟の世話、新生児の世話は、ほとんどしたことのない学生達であることはいうまでもない。

分娩場所も家庭から施設へと変化して久しく家庭分娩を体験することは、ほとんど無くなった。このような状況の中で母性看護実習を行うことは、基礎看護実習、成人看護実習を終了してはいるが、母性看護実習の対称者は今までのような疾病看護中心の病人でなく正常な褥婦の看護中心で、個別性を考え看護することを実習オリエンテーションでしっかり認識させることが大切であると考え。そのため、学生の「気づき」を大切に、それが褥婦の個性であること、異常症状とどこが異なるかを学ばせる。

今回、2施設にわたる実習は、同じ実習要綱でもそれぞれの実習施設の看護手順により臨床実習を展開するため、多少異なった指導内容があり、その内容を具体的に検討した。

1. 三校合同計画にあるように、他校に比し実習期間

が短かく学生が病棟に慣れる間がない。その上産科病棟は、他病棟と異なり分娩の予約制をとっているが、分娩数、入院患者数の多少の差が大きく実習目標を達成するには、教員のかかわりも大変重要であり、かつ教材の工夫が必要であると思われる。今後共使用しやすい効果的な記録用紙、参考資料を考えなければならない。

1) 見学記は、自由形式で、次の実習に役立つ内容を目的とするが、学生により具体的で次の実習に生かされる記録もあるが、形式のみのものもあり、ある程度形式をきめる必要性を感じている。しかし分娩見学記は、パルトグラムを作成するので、ほとんどの学生が驚きと共に児の誕生を喜びびとして受けとめれる心理状態を示しており、分娩室実習が、受持患者との人間関係作りに大いに役立ち効果的であると考えられる。

2) 知識、技術共に十分習熟しているといえない学生より一般的に「分娩時の不安」を増加させるといわれているが、⁴⁾ 学生は、産婦の状態を見て看護してあげたいという気持ちが強く真剣にとり組む姿勢から結果的に産婦の精神的な援助となっている。(産婦から、学生の記録から)

又分娩から生命誕生の意義や性行動との結びつきを学ばせ、健全な母性意識の育成、家族についての配慮を学ばせる場であるとの確信を持っている。

3) 見学実習は、先ず正しい手順にそって助産婦、教員により実習する。学生同志で見学実習することも、ある程度までは効果的であるが、学生同志ばかりで実習すると正しい手順、看護のうらづけ等から時として離れる恐れがあることが記録よりわかった。グループ最初の見学実習は、やはり指導者より指導を受けることが必要である。

2. 実習病院が、母乳栄養であり、母乳の大切さと育児の結びつきについての学びが非常に大きい。

1) 個別性看護を実習するにあたり母乳栄養は泌乳機能の促進ということで、技術もあり、量もわかり、乳房にも触れ、児との関係も密接なので、学生としても又指導者としても一番褥婦によく接触でき看護できる点であることを再確認している。

2) 褥婦の問題点が、いかに母乳を上手に適量哺乳させるかという問題解決にばかり追われ、育児、母親の復古現象の援助が十分できないことがある。これは母親の関心と学生の関心事が一致して母乳栄養に傾いており、退院後1ヶ月間の育児の問題、母親の健康回復への大きな看護援助ができていない現状もある。

3. 新生児室実習は、新生児室の環境整備、おむつ交

換、全身清拭、沐浴等のくり返しであり、2～3日すると実習計画がおろそかになる傾向が強いので4号紙を十分活用する。

1) 目標の生後1週間の生理的变化を、技術のくり返しの中で積極的に観察させるが、広い視野で技術実習にも取り組みずマンネリ化するのは、正常児なので今まで問題解決思考の看護計画であったからであろう。

2) 反面看護技術が十分実習できることは学生に自信を持たせた。これは沐浴で特にこの傾向が強い。これは保健指導(沐浴指導)も加わっており褥婦に指導するという見せ場があるので、学生としても熱心に練習を重ねていることがわかった。

3) 母児異室制は、多数の学生を少人数にして実習させる管理的な面を持つてはいるが、本来の母性看護からいえば機能別看護が強くなり個別性のある看護あるいは受持制看護を失なわせる要素を持っていると思われる。学生が、いくら受持制看護を実習していても病棟の看護体制におしながされている実情である。

4) ケーススタディ作成を実習のまとめとしているが、現在、内容的には看護記録の域を出ていない。しかし色々な資料を活用し一定の書式にまとめることは、学生にとって実習のまとめとなっているという反省はうかがえた。

1) 短かい期間に系統的に情報を収集し、問題を抽出、適確に患者個々の状態に応じた看護計画を立案し、個別的な看護を実践し評価することを目的としている。又教員と共にケーススタディをまとめて行くことにより受持制看護を行う能力を養っていききたいと思う。

2) 25名の記録を指導することは、前にも書いたように限界があり、ケーススタディが必要でありかつ有意義であるならば、もう少し小人数にして十分に指導して行きたいと思うので今後の課題としたい。

お わ り に

母性看護実習は、本学においては小児看護実習と共に実習総仕上げのようになっており、この実習が学生の将来において健全な母性の成長にまで関連する実習内容であると思われるので、内容的に深めていきたい。

又今後母児同室制看護を実習するにあたっては、本来の受持制看護を志向することになり、母児異室制看護の欠点を補って行きたい。そのためには、学生の受持患者選定にあつては、学生は勿論であるが、婦長、臨床指導者と十分話し合いをして決定する必要がある。以上。

引 用 文 献

- 1) 合田富美子：教育課程の編成・展開と学内実習の位置づけ、看護展望、17, 7, P. 17～19
- 2) 若林敏子他：母性看護学における学内実習の学習効果に関する検討 岡山県立短期大学研究紀要22, p. 103～104
- 3) 高杉紘子他：母性看護実習における具体的行動目標の作成と活用状況 第13回日本看護学会—看護教育— p. 231～233 (1982)
- 4) 菅沼ひろ子：妊産婦の心理をどうみるか、月刊ナーシング 13, 6, p. 111

参 考 文 献

- 1) Kathleen K. Guinel 稲田八重子訳：看護教育の目的と方法 医学書院、1970
- 2) 鎌田ミツ子他：臨床実習指導の考察、看護教育 26, 5, p. 301～304
- 3) 森下節子：母性看護学臨床学習における母子関係成立のプロセスの学習 看護教育, 26, 3 p. 175～178
- 4) 日野原重明他：POSの基礎と実践 医学書院 1981
- 5) 田中恵子他：早期母子関係成立への援助、助産婦雑誌, 38, 6, p. 44～47
- 6) ガイドンス編集委員会：最近ガイドンスメヂカルフレンド社 1973

昭和61年3月28日受理